

委託事業実施内容報告書

平成22年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業

【ボランティアを対象とした実践的研修】

受託団体名 国立大学法人高知大学

1 事業の趣旨・目的

日本語教育における指導者となる教員及び自治体等の国際交流担当者および一般のボランティアの日本語教授能力向上と異文化理解促進が最大の目的である。特に日本語教育の専門家でない者や経験の浅い日本語教育担当者のための支援に重点を置く。また、将来的には、産学官民連携の下に、地域における日本語教育を専門とした教員及びボランティア等の恒常的な研修プログラム実施とそのような組織や構造の構築を目指す。

2 企画委員会の開催について

【概要】

開催日時	開催場所	出席者	議題	会議の概要
7月14日	高知大学 人文学部	小澤 萬記 奥村 訓代 大崎 政良	平成22年度事業の実施 について	・日程及び担当講師の確認 ・募集方法・広報等の検討
3月9日	高知大学 人文学部	小澤 萬記 奥村 訓代 大崎 政良	平成22年度事業評価及 び次年度計画について	今年度事業評価及び 次年度以降の計画等 について検討

【写真】



3 研修講座の内容について

- (1) 研修講座名 日本語教育コーディネーターとしての教員及び国際交流ボランティア
育成講座

(2) 研修の目標

日本語教育の指導者となる教員、自治体等の国際交流担当者や日本語教育ボランティアの教授能力向上と異文化理解促進を深めることを目的とし、特に日本語教育の専門家でない者や経験の浅い日本語教育担当者のために、教授法の本質である「直接法」について、第一線で活躍する講師によるリレー講義により、そのバリエーションの中からTPOに適した教授法の習得を目指す。

また、これらの総括として、関西の日本語教育機関の協力により教育実習（講義）を実施し、日本語教育現場に学ぶ使命を課した。このような方法論から、地域における国際交流や日本語教育の中心的中核人材育成の推進に貢献する。

(3) 受講者の総数 30 人(延べ人数ではなく、受講した実人数を記載)

(出身・国籍別内訳 日本国 24人, 韓国 4人, 中国 2人)

(4) 開催時間数(回数) 40 時間 (8 回)

(5) 参加対象者の要件

学生, 教員, 一般(関心のある方ならどなたでも受講できますが、日本語ボランティア等の経験のある方が望ましい)

(6) 受講者の募集方法

高知県内教育委員会、小中学校、高等学校、大学、国際交流団体等への DM 送付と共に平成21年度の参加者へ電子メール等による案内を行った。

また、地元新聞の伝言板に募集告知掲載し広く周知を行った。

【募集要項添付】

**日本語教育コーディネーターとしての
教員及び国際交流ボランティア育成講座**

目的：日本語教育の指導者となる教員、自治体等の国際交流担当者や日本語教育ボランティアの教授能力向上と異文化理解促進を深めることを目的とし、特に日本語教育の専門家でない方や経験の浅い日本語教育担当者のために、教授法の本質である「直接法」について、第一線で活躍する講師によるリレー講義により、そのバリエーションの中からTPOに適した教授法を習得することを目指す。
また、これらの総括として、日本語教育現場に学ぶための教育実習（模擬授業・施設見学など）を実施し、日本語教育に関わる者の地域における中核人材の育成を推進する。

実施日時：平成22年8月21日（土）～8月23日（月）の8：50から18：00
※時間割については、各講師の都合により変更する場合があります。
また、日課、全日課の受講が望ましいが、希望日の受講も可能です。
なお、教育実習（模擬授業・施設見学等）は決定後、別途、受講生にお知らせします。

実施場所：高知大学新倉キャンパス人文学部管理棟人文5番教室
(高知大学新倉キャンパス交通案内：http://www.kochi-u.ac.jp/ja/m/aoc.html)

受講対象者：学生、教員、一般
(関心のある方ならどなたでも受講できますが、日本語ボランティア等の経験のある方が望ましい)

担当講師等：
8月21日（土）直接法Ⅰ
講師 JASSO大阪日本語教育センター副センター長 西澤 信夫
8月22日（日）直接法Ⅱ
講師 新宿日本語学校校長 江副 龍秀
8月23日（月）直接法Ⅲ
講師 関西国際大学教務主任 上地 聡子

主催：高知大学人文学部（文化庁委託事業）

【お申込み方法】
電話、FAX、電子メール等により参加申込書へ必要事項をご記入の上ご提出ください。
当日参加も受け付けますが、受講の都合がありますので、予め高知大学人文学部事務室までご連絡くださるようお願いいたします。

【お申込み・お問合せ先】
〒780-8520
高知県高知市堀町2丁目5-1
高知大学人文学部事務室
TEL:088-844-8172, FAX:088-844-8354
E-mail: gg01@kochi-u.ac.jp

(7) 研修会場

ア 講義 高知大学人文学部、日本学生支援機構大阪日本語教育センター
神戸東国際学院

(8) 使用した教材・リソース

担当講師オリジナルの教材・教具及び自律学習支援講座実施のため日本語教育
関連の図書を使用

(9) 講座内容

日時	講座名／学習内容	講師	受講者数
8月21日 8:50～18:00	直接法Ⅰ	日本学生支援機構大阪日本語教育センター副センター長 西澤 信夫	16名
8月22日 8:50～18:00	直接法Ⅱ	新宿日本語学校校長 江副 隆秀	11名
8月23日 8:50～18:00	直接法Ⅲ	関西語言学院教務主任 上地 睦子	11名
10月31日 13:00～18:00	教育実習（模擬授業形式の講義による日本語教育の実際）	日本学生支援機構大阪日本語教育センター副センター長 西澤 信夫 神戸東国際学院教員 須沢 美紀	20名
2月19日 13:30～16:30	自律学習支援講座 マイポートフォリオ作成にむけて	高知大学人文学部教授 奥村 訓代	6名
2月20日 16:00～18:00	自律学習支援講座 マイポートフォリオ作成1	高知大学人文学部教授 奥村 訓代	5名
2月26日 13:30～18:00	自律学習支援講座 マイポートフォリオ作成2	高知大学人文学部教授 奥村 訓代	6名
2月27日 13:30～17:30	自律学習支援講座 マイポートフォリオ作成3（発表）	高知大学人文学部教授 奥村 訓代	6名

自律学習支援講座-マイポートフォリオ作成について-

受講生それぞれの日本語教授に関する学習経験や日本語教育の経験（本務やボランティアなど）を基に、様々なテキストや日本語教育関係図書を活用して自身の経験を振り返り、

効果的な学習方法や学習上の問題点、改善点を個別に洗い出し、受講生が解決策(気づき)を話し合い、最後に発表を行うことで、日本語教育に対する意識の向上、技術の修得に寄与することを目的として実施した。

また、学生、教員、地域ボランティアなど様々な職種の参加者が交流することで地域における日本教育人材の交流にもつなげることができた。

地域の日本語教育ボランティアの実態は初期教育のみがほとんどで、個人の自学自習によるところが大きい。これらの解決策としては、振返りと気づきの機会を繰返し設けることが重要であり継続実施を検討している。

(受講生のポートフォリオの例(抜粋))

～日本語教育における反復・実践学習～

☆体験学習法☆

- (1)人間は学習過程に個人的に関わっているときに最も効率よく学習することが出来る。
- (2)もしもその知識がその本人にとって何らかの意味をもち、本人に何らかの影響を与えるべきものであるなら、それはその本人によって発見されなければならない。
- (3)その本人が自分自身の学習目標を設定する自由を持つとき、学習への関わりの度合いは最も高くなる。

「体験学習が前提とする考え方」 Gudykunstら

☆学習者主体の学習法☆

- (1)学習過程に個人的に関わるために
 - ・考えさせる学習。
 - ・自発的な学習。
- (2)学習に意味を持たせるために
 - ・これができれば、次はこれができる。
 - ・次につながる学習であることを伝える。
- (3)学習目標を設定させるために
 - ・なぜ勉強するのか、具体的な目標を設定させる。

☆具体的な学習方法の提案☆

状況:学校内に設置された語学教室における日本語教育。

チューター制度がある

人数:10～15名程度

場所:初期→日本人学生から離れた環境

それ以降→日本人学生と同じ建物、隣の教室など

○一方的発話から会話、そして討論へ…

一方的発話:自己紹介、他己紹介

会話:初対面の人との挨拶、スムーズな人間関係のスタート

↓

電話での会話

話し合い:自分の意見を発表、相手の意見を聞く、まとめる

☆一方的発話(自己紹介・他己紹介)☆

1. 活動の意義・目標

・自己紹介の定型習得。

(はじめまして。私は～です。よろしくお願ひします。)

- ・他人について説明できる。
(より多くの単語に触れる、クラスの団結)
 - ・自己紹介の学習を終えたらチューターを紹介する。
2. 具体的な方法・手順例
 - ①自己紹介の定型を学ぶ。
 - ②各自、自己紹介に必要な単語を調べる。
 - ③自己紹介カードに簡単にメモする。
 - ④カードを基に自己紹介(①～③のまとめ)
 - ⑤他人のカードを使い、他己紹介。(反復練習)
 3. 評価
発音・アクセントよりも、自己紹介の定型が身についているかどうか。
 4. 応用・発展
カードがない人の紹介をしてみる(母国の友人について)
母国についての紹介など…

☆電話をかける☆

1. 活動の意義・目的
 - ・電話のかけかた、対応を学ぶ
 - ・実践で使えるようにする(就職など…)
2. 具体的な方法・手順例
 - ①電話の際の定型文を学ぶ。
 - ②クラス内で練習
 - ③実際に電話をしてみる(配達など…)
 - ④復習
3. 評価
 - ・相手に上手く伝わっているか。(きちんと成立しているか)
 - ・電話の定型文をきちんとおぼえているか
4. 留意点
 - ・どこに電話するかは教師が決めておき、事前に連絡をしておく。(留学生の学習であることを伝える)
5. 言語項目例
もしもし／〇〇ですか？／〇〇ですけど…／

以下省略

【ポートフォリオ作成風景】



(10) 講座の評価

① 受講生に対するアンケート

昨年に引き続き、実践的ですぐに役立つ内容が完備されているので助かるという意見が多く、好評であった。とくに日本国内で教える時の基本となる直接法のメリット・デメリットや必要性、ならびに注意点が理解でき、授業との連動制が見えてきた。その上での模擬授業参観などで、直接法全体がやっと把握できかけてきたような気がする。また、色々な教材をもとに、参加者が自分のテーマを発見し、それを追求・解決する自律学習支援講座もまとめとして、また自分のおかれている環境と使命を痛感させられる内容の濃いものであった。初めて「参加している。やったー。」と実感させてくれる内容であった。

② 実施主体からの研修内容結果評価

昨年からの特色である日本語教育機関の視察並びに授業参観と、理論や学習とのより一層の連動と理解を助長することに心がけた。また、少し時間をあけて、各自が自分の課題を発見し、その課題解決にむけてどのようなアプローチが必要で、どのように行っていけば良いかを模索する実践講座「自律学習支援講座・マイポートフォリオ作成」は、当初の不安を大きく覆し、最終的に各自が自分の課題を発見するのみならず、解決する手段や方法をしっかりと見つけ発表することもできた。

③ 実施主体からの外国人支援体制等今後の計画

これから日本語教師として国内外に巣立つ日本語教師のたまご(就職先・国決定者)やボランティアとしてベトナム等で指導される方、および私立高校の日本語教師には、今回も参加してもらい学んでもらうことができた。しかし、公立小・中学校で取り出し授業として日本語を担当している教員や関係者の参加が割合からすると少ないことが、次年度の大きな課題であると感じている。

【発表ポートフォリオ資料】

【文化を背景とした日本語独特の表現方法】

- ・配慮・気配表現の分類は、大いに参考になりました。
各4分類(枕ことば的表現、緩和表現、受益表現、謙譲表現)
- ・各分類ごとに、その実例が詳細に記載されており、よく理解できた。

【日本語教育における反復実践学習】

- ・自己紹介、他者紹介大いに参考になり、教室で使いたいです。自己紹介カードの実物も見せてもらえて、大いに参考になった。
- ・韓国が好きになったようで、韓国留学してきたことは良かったのではないか？

(受講生の感想)

- ・わかりやすく整理されていて、多くの知識を得た。授業でも大いに活用させていただきたいと思う。時間があつたなら、学生との間にあつた事例や、今回の研究を現場でどのように組み込んで教えていくのか(どんな順番で、どんな授業や場面で、どんな方法で等)かといった部分へ広げていっていただきたい。
- ・ご自身の韓国での韓国語習得の実体験に基づいた提案で、やる気にあふれた内容で、学習者の感覚に近いのではないかと感じた。一つ一つを丁寧にまとめ考察を進められていたと思う。もう少し発表をわかりやすくするためには、対象者像(レベルや何のためにどこで日本語を学ぼうとしている人たちなのか、どれぐらいの期間、どんな割合で学習をする人たちなのか等)を明確にした方が良かったと思う。
- ・聴解というものを改めて考え直すきっかけを一緒に持たせていただけたと思う。「話せるようになってもらう」ための聴解力向上というテーマで、学習者の状況をいろいろな角度でとらえ、多様な試みを考え実践されたり、計画をされていて素晴らしいと思った。この考察から、他の能力との関連をどのように授業にとりこまれていくのかを、また次の機会にうかがいたい。

(11) 事業の成果

① 他事業との連携

一部同じような事業をおこなっている(県)国際交流協会等との棲み分けも確立され、定着してきている。特に単なるボランティア養成ではなく、TPOに合った、同時に自分をいかすボランティア育成という視点、および自分の課題追求をするボランティアのあり方の意義等も自分を通して感じることのできる講座として差別化が可能となり、その意味でも他の講座や事業との連携や役割分担が容易となってきた。

② 研修後の人材活用

既に日本語教育ボランティアとして活躍している者や、今年から日本語教師として海外の高校や大学で日本語教育に従事する者も多く含まれており、今後日本語ボランティア活動や職業として日本語教師を希望する学生、ならびに社会人にも大きな刺激となり、同時に現職の日本語教員にはよいリフレッシュとブラッシュアップの機会となった。

(12) 今後の課題

円高の影響や、グローバル化の世代においては、今までの日本への留学者を対象とする日本語教育は、今後少しずつ姿を変化させ、受講者が自分の生活空間にいながらにして学べる環境整備にともなった日本語指導やアプローチの方法を駆使し、如何に答えられえるかという新たな課題に対応できるボランティア養成が急務となり、従来型の日本にいながらにして受け入れを主体とする受け身型のボランティアから、求める人がいる海外に飛び込んで、自主的に日本語を指導できる能動型日本語教師の需要が大いに必要視されていると感じている。そのためにも、自己発見型あるいは自己追及型日本語ボランティアの育成が急務であり、それをするのが本事業の特色であると確信している。